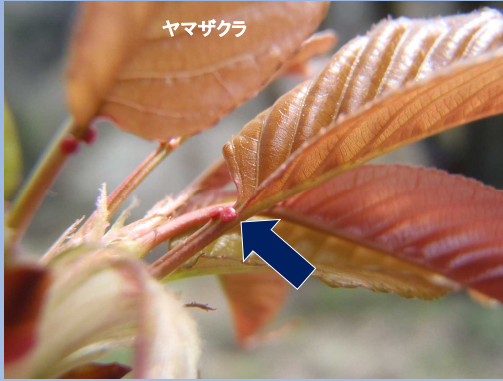
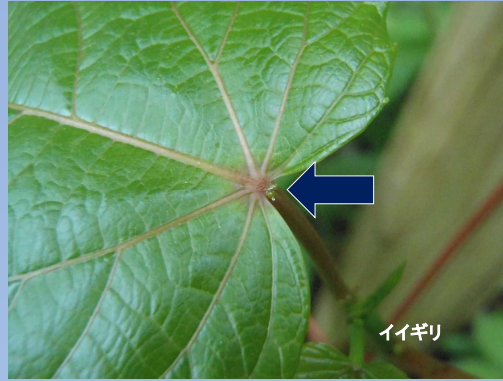


植物、アリを使う

植物は、いろいろなところから蜜を出します。多くの花には蜜腺があって、訪花昆虫をひきつけ、花粉を運ばせます。ところが植物は、花ではないところにも蜜を出しています。花外蜜腺といいます。



ヤマザクラ



イイギリ

葉、葉柄に蜜腺のある樹木は、何種類もあり、サクラ類もその仲間です。蜜を出しているのは、葉がまだ成長中の柔らかいときで、成熟した葉からは、蜜を出していません。蜜腺はコブになっていたり、周りとは色が違ったり、質が違っているので、落ち葉になっても見分けられます。

葉から出る蜜には、アリがやってきます。



アリは、蜜をなめに来ているだけで、植物のために働くわけではありません。しかし、アリがいつもいることで、葉を食べる虫が近づきにくくなります。小さい虫なら捕食することもあります。アリは自分でも知らないうちに、ガードマンとして植物に使われていたのです。成長した葉は硬く、食べにくくなるので、もうガードマンは必要なくなり、蜜も出なくなります。

アリは他の昆虫を撃退するといっても、アブラムシだけは撃退するどころか保護します。アブラムシが余った糖分を「甘露」として出すからで、これは植物には想定外？



さて、アリがアブラムシを保護するのなら、植物がまだ蜜腺を作らなかったときは、植物→アブラムシ→アリという関係ができていて、ここからアブラムシを介さない植物とアリの関係が生まれたのかも知れません。あくまで想像ですが。

アリの仕事はこれだけではありません。種子の運び屋として使われる昆虫はほとんどありませんが、アリだけは例外で、アリを種子運搬係に雇っている植物がたくさんあります。草本に多く、小型の種子に柔らかい「おまけ(エライオソームという)」が付いているのが特徴です。



↑ ヒメオドリコソウ
←ホトケノザ
同じグループ(属)の植物で、種子も似ています。



↑ アオイスミレ
スミレ属の種子は全てエライオソームを持っていますが、その中でアオイスミレには特に大きなエライオソームが付いています。



↑ ムラサキケマン
このグループ(属)の植物の種子も皆エライオソームを持っています。

